

<今日の説教のポイント コリントの信徒への手紙Ⅱ 10章1-18節>

「誇る者は主を誇れ」と語るパウロが持っている考え方を学ぶその1。

1 キリストの優しさと心の広さをもって事にあたる。

コリントの教会の中にパウロのことを悪く言う人たちがいて混乱を生じさせていました。彼らは、パウロが手紙でしかはっきりものを言えないと言って見下していました(1-2、9-11)。しかしパウロはその彼らに「**キリストの優しさと心の広さ**」(1)をもって臨もうとしていることが分かります。パウロは以前は正義感の強い人で、間違っていると思った人にはいくらでも強く当れる人でした(使徒言行録9:1-2)。そのことを思うと、この言葉から、パウロが復活の主にとらえられて大きく変えられたことが分かります。かつての自分に向かって来て下さった「**キリストの優しさと心の広さ**(マタイ11:29 柔和と謙遜)」を思い、自分も他の人に対して同じ様に生きようと思うようになったのです。私たちがそうありたいと思います。

2 私たちの武器は肉のものではなく、神に由来する力。

「私たちは肉において歩んでいますが、肉に従って戦うではありません」(3)。いい言葉ですね。パウロはこのような言い方をしばしばします。大事なことは、その時パウロはいつもイエス様を復活させられた神様の力を考えているということです。「もし、イエスを死者の中から復活させた方の霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリストを死者の中から復活させた方は、あなたがたの内に宿っているその霊によって、あなたがたの死ぬはずの体をも生かしてくださいでしょう」(ローマ8:11)。神様を見つめて生きるとは、この神様の力を思って生きることです。もう自分を自分で守るために、自分を強く見せる方法を色々考える必要はないのです。それによって「柔和と謙遜」であることも可能となって来るのです。

3 うわべだけを見ず、その人に働かれる神様を見る。

キリスト者になるということは、自分だけでなく他の人にも働かれる神様の力を思いながら生きようになるということでもあります。それは「**人のうわべのことだけを見る**」(7)見方を変えてくれます。そうになると、当然、人を変わらぬものと決めつけて見下したり恐れたり、自分の力で無理に変えようとして脅す(パワーハラメント)ようなことから解放されていきます。神様を覚えながら生きる幸いを思います。